渋沢栄一の民間外交（2020.9.21）

西村康裕

＜はじめに＞

今年１月から社団法人ディレクトフォースの企業ガバナンス部会の小研究会「渋沢栄一の経営理念」に参加した。研究成果全文（6 章　91 ページ）は７月にディレクトフォースのホームページに掲載されている。以下は私が執筆した第１章「渋沢栄一の民間外交」を加筆修正したものである。

１、90 歳の談話

渋沢栄一は９１歳の生涯で４８０余の会社の設立や経営、顧問、金融支援などの足跡を残した。日本の「資本主義の父」とも呼ばれている。２０２４年には新一万円札の顔となる。

彼は７０歳で実業界を去り、教育・慈善活動などの社会活動に人生の重点を移した。そして国際交流においても大きな活躍と功績があった。９０歳を超えた渋沢栄一の談話（『渋沢栄一伝記資料』２５巻 529 ページより）には以下の記述がある。

「嘉永年間ペリーが我が国に初めて来た当時、私は年少であったが、国の内外に「外夷打つべし」という強硬論によって、西洋人は悉く我に仇をなすものと思っていました。（中略）その後日本の地位を安固ならしめ、世界の平和を図るためには、問題の起こり易い太平洋に眼を注がねばならぬ、そして米国とは支那の関係もあることとて、殊の外親しく置かねばならぬ、という根本的な考慮を持つようになり、道理正しく相互に譲りあって行かねばならぬと考え色々尽力したのであります。（中略）政治上の親善のみでなく、民間同志の接触が必要であるとして自ら大いに努力して居ります。」

この談話は彼自身の国際交流に対する総括的感想であると思われる。

この小論は、国際交流活動の概要、時代背景、そして渋沢の思いを纏めたものである。

尚　論文は研究会での発表用のレジメをベースに文章化したので、各節はレジメの項目を提示し解説する形式となっている。また「太平洋にかける橋　-渋沢栄一の生涯-」（1970 出版　渋沢雅英著）と「国際交流に託した渋沢栄一の望み」（2019 出版　飯森明子編著）を主に参考にした。（注；年代は西暦表示に「年」を省略している）

2、 国際交流にかけた**生涯**

１）1867 の渡欧

滞在２年弱、上海、ベトナム、スエズ運河経由パリ万国博覧会と欧州訪問）

国債運用で巨大な利益（金融への理解深まる）

２）　西欧文明への憧憬と恐れ→明治政府に協力、富国強兵策を推進

- 国家主導の産業育成へ（明治政府と共通の意識）→殖産興業
- 金融制度、株式会社（合同会社）、証券市場育成など産業インフラ整備

３）1873 大蔵官僚を辞職（第１国立銀行総監役を経て 1875 頭取就任）

利益追求と国益追求（パブリックとステークホルダー）

４）「論語と算盤」を晩年に執筆

- 問題意識（悪しき資本主義、悪しき競争主義への警鐘）
- 利益追求と倫理観のバランス、武士道精神の尊さ

５）徳川慶喜への報恩（鋭い国際情勢認識に驚嘆、「公爵」「貴族議員」へ推挙運動）

この節では徳川慶喜への報恩について解説する。渋沢は青年期から渡欧まで幕臣となり一橋家に仕えていたので、大政奉還と鳥羽伏見の戦いでの大阪城からの兵士を残して帰京した徳川慶喜将軍を軽侮する感情を懐いていた。しかし晩年、慶喜のこの行動は当時の国際情勢を鑑み、国内を二分する争いが続けば外敵英仏に日本侵略の隙を与えると懸念した上での熟慮英断だったことに気づく。その為渋沢は晩年慶喜を華族で最高位の公爵に推挙するなど名誉回復に尽力した。

この契機の名誉回復の活動は、慶喜と同様に渋沢の国際感覚の鋭さを表している。日本の置かれた国際的な状況判断は生涯彼の行動の根底にあった。

３、 国際情勢の概要

１）19 世紀の日米関係はハネムーン（1860～）

- 初代Ｔハリス公使→日米通商条約 1858　サムライ精神が基盤
- 米国も欧州帝国主義を警戒しモンロー主義の伝統を守りつつも、アジア（特に中国）進出の足掛りに日本の近代化を支援した（注：米国のアジア外交は日中を天秤にかける伝統がある）

２）日本の国際的地位向上と排日の動き（1894～1910 頃）

- 日清戦争で軍隊の近代化に成功（1895 から黄禍論が始まる）
- 日露戦争の勝利で米国の疑心暗鬼生まれる（米国のオレンジ計画は 1897）
- 日英同盟（1902～1923）　→米英覇権構造に変化、
- 米国加州での移民排斥運動劇化（日本人学童差別→土地所有制限

３）第１次世界大戦（1914～1918）

- 欧州への失望へ（ガス兵器の使用　３７百万の戦争死傷者、スペイン風邪で数億人感染し数千万人死亡）
- 文明として欧州から米国への期待（新興国、理想主義、公平公正）
- 国際連盟設立へ（ウイルソン大統領との交流と期待）

この節では日米関係の変遷について解説する。１９世紀日米関係は概ね良好であった。お互いに英仏を代表とする西欧帝国主義を意識し相互協力する関係があった。初代公使のタウンゼット・ハリスのサムライ精神に共感し、江戸幕府は日米通商条約を天皇の許可なく締結する。その背景にはペリー来航（黒船）の脅威や中国のアヘン戦争以降の冷酷な国際政治がある。尤もこの条約が江戸幕藩体制を崩壊させる引き金になるとは幕府は予想もしなかったであろう。

日清・日露戦争の勝利で米国は日本の底力に驚き疑心暗鬼になっていく。1908 米国大西洋艦隊（グレート・ホワイト・フリート）が横浜港に寄港する。黒船に対して白い戦艦だったので「白船」と言われた。こうした米国の外交方針は「オレンジ計画」と呼ばれ 1897 から海軍省で作成された。この明らかな示威行動は米国の対日方針の変化であった。渋沢は第２次世界大戦に至る経緯を知らずに没したが、中国を巡る日米の対立が根底にあることは熟知していた。2020 の米中対立は 1920 の日米対立と非常に似た関係にあると思われる。

４、　民間外交のはじまり

- ✧ **グラント元大統領来日と接待委員総代**（1879）
- ✧ **欧米渡航**（1902/5～11）、**英国観と日英同盟**
- ✧ **中国との交流**（**孫文、袁世凱との出会いなど**）

この節では、ユリシーズ・グラント米国大統領の接待総代としての活躍を紹介する。渋沢は、渡欧から帰国して１０年間政府に協力し、殖産興業を大蔵官僚として活躍した。その後民間経済の発展に寄与するべく官僚を辞職し第一銀行初代頭取となった。

そうした頃に前米国大統領がアジア漫遊の帰路日本に立寄ることとなった。このニュースは半年前から報道され国を挙げて大歓迎のムードとなる。文明開化を急ぐ明治政府にとっても最高の PR チャンスと考えた。しかし欧米では国賓歓迎の際、民間主催の歓迎がしきたりであり、民主主義の生態的特徴でもあったが、当時日本にはこれに対応する組織がなく、政府は急遽渋沢に民間主催の歓迎会の役目を依頼した。元来接待好きの渋沢は、歌舞伎・上野の花見・大宴会などで大成功をおさめた。

この歓迎行事は国民レベルで米国という外国の存在を脅威だけでなく優れた国として知る機会になった。日本は米国の強さ・若さ・価値観を認識し、米国は日本を他のアジア諸国と異なり武士道精神を持つ文化水準の高い国家として認識した。そして日米双方が「お互い話せる相手」として理解し合う契機になったように思える。欧化政策の象徴ともいえる鹿鳴館時代はこの歓迎行事から数年後のことである。渋沢の民間外交の始まりといえよう。

５、　４回の渡米

１）1902/5/10~10/31（６３歳）；友好親善　夫人同伴

（5月ハワイ　６月シカゴ、ＮＹ　ワシントン　7月リバプールからロンドン、8月ブリュッセル、ベルリン、9月ハンブルグ、ロンドン、パリ、10月コロンボ、シンガポール、香港、神戸）

1902/6/16Ｔルーズベルトとの会談

「美術文化から産業発展へ」➡日露戦争終結に支援

1905/　日比谷焼打ち事件の日に東京でハリマンと会食

1906/　サンフランシスコ地震援助、1907 学童隔離命令は大統領令で撤回

２）1909/9~12/17（70 歳）；友好親善　関係悪化の兆し

（9 月シアトル、シカゴ、10 月 NY, ボストン、11 月ワシントン、ロス、サンフランシスコ、12 月ホノルル、横浜）

米国では日露戦争で外債消化と終戦交渉支援するも門戸開放で不満が残った。

３）1914/10~1915/1/5（76 歳）；パナマ運河開通記念博覧会、相互理解に一定の成果

（11 月ホノルル、サンフランシスコ、シアトル、シカゴ 12 月 NY で前 T ルーズベルト会談、ウイルソン大統領会談、サンフランシスコ、ハワイ、横浜）

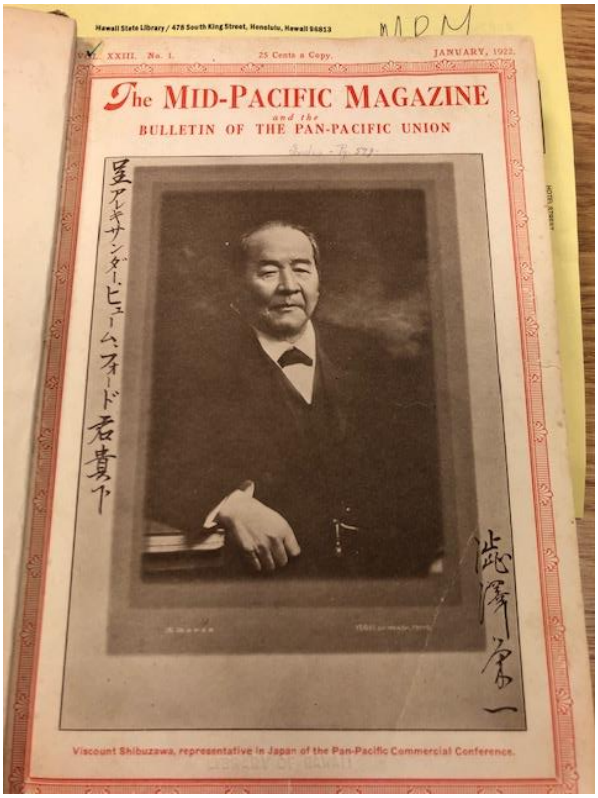
４）1920/10~11/30（８１歳）；ワシントン軍縮会議兼　民間外交の限界と絶望

（10/22 ホノルル、サンフランシスコ、11 月 NY, ワシントン、ハーディング次期大統領会談、フラデルフィア、ロス、サンフランシスコ、ハワイ、横浜）

➡1923 日英同盟の消滅➡1924/7 排日移民法成立

（注：面談した米国大統領（Y グラント１８６９～１９７７、Ｔルーズベルト 1901～、Ｗタフト 1909～、Ｗウイルソン 1913～、Ｗハーディング 1921？～

渡米記を概観すると最初の２回は友好親善であるが、後半の２回はサンフランシスコの学童差別問題に始まる排日運動の火消しが大きな役割になってくる。そして 1918 の対華２１か条要求などで日中関係は極度に悪化し、米国の対日不信に大きく影響していく。1924 の排日移民法の成立はそのゴールとなった。この法律を知った渋沢は、「これまでの全ての努力が無駄になった」と嘆いたといわれている。日本人は人種差別に非常に反発する。1940 真珠湾攻撃の報道を受けた日本人が歓喜したのは、米国の排日差別政策への反発があると思われる。



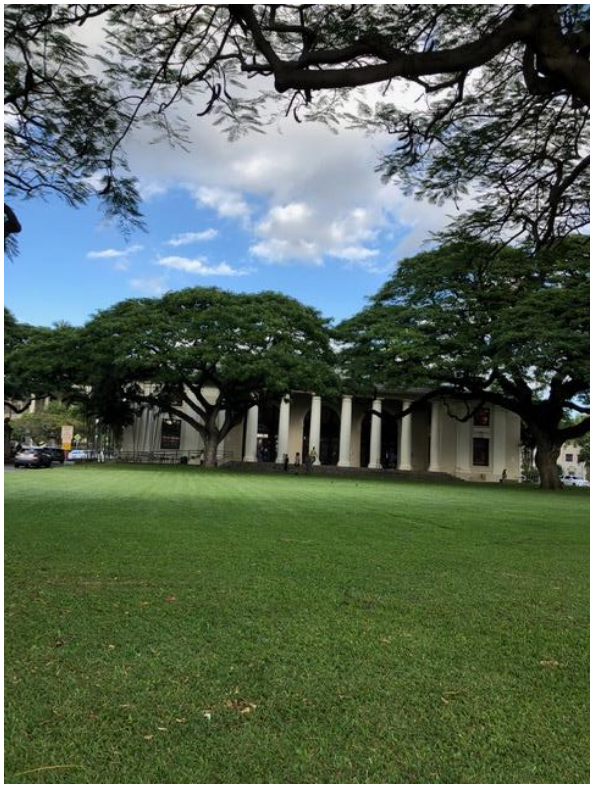
ところで渋沢は渡米の途路に何度かハワイに立ち寄っている。1882 ハワイカラカウア国王が国賓として来日した際には、渋沢の私邸に招待している。この時国王より米国による併合が近づいており日本人の移民促進を請願された。その結果 1900 のハワイの人口１５万人の内日本人は６万人となった。

1898 にハワイは米国に併合されたが、1902 の渡米の際前女王（カラカウア国王の妹）と面談し旧交を温めたと記されている。また MID PACIFIC MAGAZINE の 1922 年１月号の表紙を渋沢栄一が飾った。

渋沢が汎太平洋同盟（Pan Pacific Union ）の日本側代表となり、太平洋地域の平和と安定に貢献したことは有名であり、地元市民にも親しまれていたことの証であろう。（写真参照：ハワイ州立図書館と MPM 表紙　筆者撮影）

６、　　結びにかえて

「論語と算盤」は 1916 出版であり渋沢 76 歳の作品である。生涯の経験から悟った教訓 63 節が簡潔にまとめられている。その中から国際交流と商道徳に関連するものを引用紹介したい。



- ２５節　ビジネスの本質

「本当の利益追求というのは仁義道徳に基づかなければ決して永続しない。＜中略＞今の中国のように、自分さえ儲かればよい、人はかまわぬというようになれば、国家社会をよくしようとする人もなくなり、孟子ではないがいずれ国を危うくしてしまう。」

- ４９節　ルーズベルトとの会話　そしてその後の日米関係を心配した話

「大統領閣下は、私に向かって美術と軍隊だけをお褒めになった。次に大統領にお目にかかる時は、日本の産業や経済に対して賞賛の言葉があるように、私も国民を率いて努力していきます」

● ５１節　善の競争と悪の競争

「他人のものを真似して利益をかすめ取ろうと考え、正当な対価を払わずにこれを侵害するというのは、悪の競争である。」

● ５４節　行き過ぎた外国崇拝との訣別

「自由な貿易と流通は経済の大原則であるべきであって、私はいたずらに排外主義をあおるつもりはない。排外主義、国産偏重主義は国家の大損失になるのだ。＜中略＞

ただ強く述べたいのは、我が国にふさわしいものをつくり、わが国にないものや、不得意なものを輸入することを心掛けていこうではないかいうことだ。」

渋沢の国際交流を通じた教えは、悪しき資本主義（利益と道徳のバランス）を戒め、自由貿易のバランス（愛国主義と国際主義）である。そして英国商工会議所（1902 渡欧）での思い出から個人の道徳倫理が、家族・社会・世界と連なり国際間の信頼に繋がると説いている。

今年１月のダボス会議のテーマは「資本主義の再定義」であった(注；田中教授の論文参照）。リーマンショック以降「資本市議の見直し」が大きなテーマとなった。世界経済の悪化が昨年から深刻化しており、「株主価値最大化」「金融資本主義」への批判も依然根強い。

渋沢は１００年以上前から欧米で発達した自由主義経済体制の優れた効果を認識し、明治政府の富国強兵策に大いに貢献した。しかし同時にこの体制の負の側面や限界を見抜いていた。

晩年の国際交流活動の目的が、国際平和を希求したことはその伝記などから明白である。明治人の気質は国家の危機を自分事とすることであった。青年時代の幕府崩壊と明治維新を体験した渋沢には特に危機意識が強かった。そして国家間の友好親善に国民一人一人の道徳観が最も重要との結論に至った。最終的には個人一人一人の道徳観の醸成なくして国際的な信頼はないと考えたように思う。

７、　参考図書

「太平洋にかける橋　渋沢栄一の生涯」　渋沢雅英著（1970 初版）
「国際交流に託した渋沢栄一の望み」　飯森明子編著（2019）
「渋沢家３代」　佐野眞一著（1998）
「小説渋沢栄一」　津本陽著（2004 初版）
「論語と算盤」　渋沢栄一著（1916 初版）
「渋沢栄一自伝」　守屋淳編訳（2012）
「渋沢栄一 100 の訓言」　渋澤健著（2007）
「MID PACIFIC MAGAZIN」（ハワイ刊行の雑誌 1922/1 号）
「論語と算盤」と「資本主義の再定義」～経営責任としての公益追求～
月刊監査役（2020 年 4 月号）　田中一弘氏（一橋大学教授）

以上